

19世紀後半から第一次世界大戦勃発前までの約半世紀のヨーロッパ各国をまとめよう。

ドイツ

1) 「世界政策」への転換

1888年、ドイツ帝国の新皇帝【1: 世】位1888-1918が即位した。29歳の新皇帝は、1890年、ビスマルクを退任に追い込んだ。直接的原因は社会主義者鎮圧法の存続についての意見の対立だった。同じ1890年、ロシアはビスマルク時代に締結した独露再保障条約の更新を求めたが、いっそう積極的な対外膨張政策を決意した新皇帝は更新を拒否した。この1890年をもってビスマルク体制は崩壊した。翌1891年にはビスマルクが最も警戒していた露仏同盟（1894年に完成）が結ばれた。

ヴィルヘルム2世は「世界政策」と呼ばれる帝国主義的膨張政策を展開した。「ヴィルヘルム2世の」を省いても、それは普通「ヴィルヘルム2世の世界政策」の意味である。彼は、大艦隊の建造に着手し、イギリスと建艦競争を始め、「陽の当たる場所へ」をスローガンに、中緯度の資源のある植民地の獲得に乗り出した。しかし、モロッコ事件では英仏に完全にやらされた。

ドイツ人はオーストリアなど近隣諸国にも住んでおり、こうした国外のドイツ人をも統合して大帝国の建設を目指す【2: 運動】が市民層にも広まり、「世界政策」を支持した。この底流が第一次、第二次世界大戦におけるドイツの動向を形成する大きな要素となる。

親政開始にあたり、ヴィルヘルム2世は「老いた水先案内人に代わって私がドイツという新しい船の当直将校になった。全力をあげて航行せよ」と述べた。これが「世界政策」を「新航路政策」とも呼ぶ所以（ゆえん）である。

ヴィルヘルム2世の母はイギリスの【3: 】の長女ヴィクトリア。父は初代ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の王子。父は1888年、ドイツ帝国第二代皇帝フリードリヒ3世として即位したが99日で死去、第三代皇帝ヴィルヘルム2世の即位に至る。軍籍は陸軍にあったが、幼少期に海洋や海軍に興味を持っていたため先のような発言をした。独特の髭は日本でも「カイゼルひげ」として有名である。1918年、革命により退位、オランダに亡命。ドールンで悠々自適に暮らし、ドイツ国内の帝政復古派の運動を支援し、1941年に死去するまでドイツ保守層に一定の影響力があつた。ヒトラーとも親交があり、1940年のパリ占領時には祝電を打っている。

2) ヴィルヘルム2世は、1890年に【4: 】を廃止した。

これを受けてドイツ社会主義労働者党（1875年結成、世界初の社会主義政党）は、【5: 】と改称した。1890年の選挙で142万票を獲得、35議席を確保。1891年、マルクス主義的なエルフルト綱領を採択、世界一の社会主義政党となった。

エルフルト綱領の起草者のひとりであった【6: 】1850-1932はイギリス亡命中に変節し、19世紀末の一連の論文で古典的マルクス主義を批判し、労働者階級の生活改善と中産階級の発生を根拠に革命不要説を唱えた※。これに対して、ローザ=ルクセンブルクらが激しく反論したことは言うまでもない。1901年、社会主義者鎮圧法の廃止により、ドイツに帰国。1903年、ドレスデン党大会で修正主義否認が決議され、ベルンシュタインは公式には敗北したが、運動面では根強い支持を得つづけ、本人とその信奉者がそれをどう評価するかは別として、いわゆる社会民主主義、【7: 】

の理論的創始者と見なされている。ヴァイマル共和国議会議員を務めたこともある。後に第二インターナショナルの運動論にも影響を与えており、単にドイツ社会民主党内の論争に留まらず、世界中の革命運動に影響を与えた。日本も例外ではない。

【5】は1912年帝国議会で第一党に躍進したが、第一次世界大戦では戦争政策を支持し評価を落とした。……ナチ政権下は複雑を極めるので省略……第二次世界大戦後、この政党は同じ名称のまま存続、西ドイツでは1959年以降マルクス主義を捨て、議会による漸進的改良をめざす中道左派の国民政党に変貌した。

※ これは今日でも様々に姿形を変えて再生産され続けている。たとえば《労働者が家や自家用車はおろか勤務する会社の株まで持っているの、階級闘争などとつづくに消滅した》などと。

ロシア

1) 経済成長と大きな課題

露仏同盟(1894)以降、【8: 】から資本を導入、重工業中心の産業資本主義化が推進された。都市部では大経営が急速に成長したが、その多くは外国資本の支配下にあった。ツァーリズムの下で人民の暮らしは貧しく生活水準は低かったから、国内市場は狭かった。【9: 】の建設を開始（1891）し、開発を進めると同時に東アジア進出を保障する手段とした。

2) 専制体制への批判も強まった。工業化が進展しているのに、人民の生活苦は一向に良くならない。

①マルクス主義を掲げる【10: 】が1903年※に結成された。指導者はレーニン1870-1924である。結成直後にボリシェヴィキ（「多数派」の意味：少数の革命家に限定、武装蜂起も辞さず）とメンシェヴィキ（「少数派」の意味：広く門戸を開き漸進的革命を行う）に分裂した。

※ 結成年を1898年とする説（旺文社『世界史事典』など多数）もあるが、直後に全メンバーが逮捕され活動できなかつたため、実質的に活動を開始した1903年を結成年とした。（山川出版社『世界史用語集』他）

②ナロードニキの系譜をひく【11: 】が急進的學生や知識人によって結成(1901)された。もちろんマルクス主義ではない。通称エスエル。有力者ケレンスキーは1917年の二月革命で臨時政府に入閣し、7月以降首相となっている。

3) 日露戦争によって国内の不満をそらそうとしたが、逆にロシア経済の弱さが暴露された。

①第1次ロシア革命（1905年1月～6月）

1905年1月22日、首都ペテルブルクで【12: 】起きる。それは修道士ガボンに率いられた民衆の平和的

